大12.7.16 政
399

階級戰本義

——全國プロレタリアの鬪士に檄す——

一

立法部參與權すら持たない今日の無產階級は、實は階級鬪爭の最も鋭利な、當然に持つべき武器を持たないものである。たゞ遠吠をして居るに過ぎない。ブルヂオアとプロレタリアとの、接觸點たる政戰權が無いのだから、鬪爭とは名のみ、空言に過ぎない。勞働爭議に於ける經濟運動の如き、經濟戰では無くて、經濟懸引である。値上げしろ罷りならぬ。では罷工する、勝手にしろ、斯くて間もなく慘敗である。一切の階級鬪爭は政治的鬪爭であると云つたマルクスの言葉は、割引なしに採られ得る革命運動上の眞理である。政治運動、又は議會運動とは、プロレタリア議員の頭數だけを殖して行く運動では無い。否その運動だけでいくのちや無い。否、持つべくして持たない有力な武器、參政權を獲得し、以て經濟組織の支持力たる政治權力を收奪するに在る。

二

吾々無產階級には、制度上の一切の機關をば、參與から利用へ、利用から逆用へ、逆用から收奪への迪りのみが可能である。破壞と言ひ建設と言ふも、その收奪の後に屬すも事實たらざるを得ぬ。テロリズムが何處まで可能であるかは別問題としても、その効果が要するに『利用から收奪まで』を容易ならしむる迄である事は確實だ。ネラルストライキの可能狀態と云ふのも畢竟、この『利用』の結論たる『收奪』の利く環境に外ならぬ。

三

普選なくして政權なく、政權なくして政治運動なく、政治運動を缺いては階級鬪爭の實質なく、革命運動の本義が無い。その普選を吾々無產階級の理想する徹底的のものたらしめて實現せしむべく、そして之を吾々の根本目的達つての主要手段として獲得すべく、吾々は積極的な普選獲得運動者で無ければならぬ。

——一九二三年四月——